



《伝統文化・神楽・祭・イベント》

① 寒田神楽・鎮火祭（寒田神楽講）

分類／伝統文化・神楽 自治会／寒田

住所／飯盛神社・山霊神社

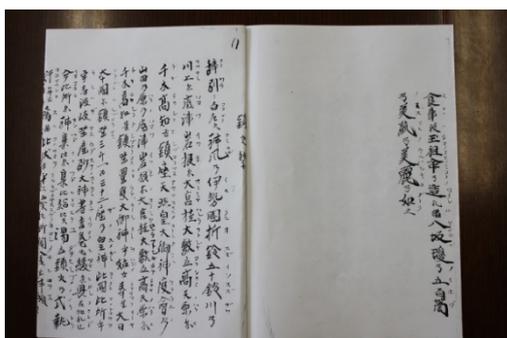
寒田神楽の由来は確かではありませんが、寛文5年（1665）に山霊神社が火災で焼失した際、神職が鎮火祭文を奉じて鎮火祭を始めたことが起源であるとされています。当時の神職は2年をかけて神社を再建し、寛文7年（1667）に神迎神楽を奉納して、遷宮を行いました。それ以来、秋の鎮火祭で湯立神楽が奉納されるようになったと、伝えられています。



昔は、舞い方、囃子方共に「山霊神社奉楽定」に基づき、世襲制により受け継がれていました。昭和43年に宮柱、宮司を中心に神楽講が発足しました。

秋祭りでは、日本全国の一宮の神々を寄せて、鎮火祭で湯立神楽を奉納しますが、神楽の奉納には、かなりの鍛錬や精進を必要とするため、毎年開催は難しいのが現状です。平成26年に10年ぶりに奉納を行ったのが最後と思われますが、厳しいしきたりや「舞師（まいし）」と言われる許可を持つ者が不在となったことが難しい理由と考えられます。

寒田神楽の大部分は、出雲神楽の系統に属する神楽と考えられます。湯立神楽は舞庭に、上部を幣で飾った約 10m の孟宗竹を立て、33 把の薪木を燃やして湯をたぎらせ、その湯を振って祓い清めた後に、猿田彦神が探湯(くがたち)をします。神棚に東西南北と中央の神を表した五色(人形旗)を祀り、祝詞奏上で火を鎮め、3 名が火床の上を渡った後に「湯鉢」によじ登り、「湯鉢」の上に取り付けた御幣を切り落とし、逆様になって滑り下ります。これを「幣切り」といい、御神霊の降臨を意味します。湯立神楽は伊勢系神楽の系統に属する神楽とされますが、「竹に登る」「幣切り」などの演目があるところから、修験道の影響を大きく受けていると云われています。



② 神幸祭

分類/祭 自治会/寒田 **住所/飯盛神社・山霊神社**

一年間の五穀豊穡を願って、寒田地域の神幸祭が行われます。統括は岩戸見神社の宮司が執り行うため、岩戸見神社の神幸祭とずらして行う必要があります、寒田地区のみ日時を変えて開催されていました。(岩戸見神社から寒田地区が遠かったからという説もあり)その為、山霊神社、飯盛神社の神幸祭として、現在では執り行われています。

③ 収穫祭

分類/祭 自治会/寒田 **住所/飯盛神社・山霊神社**

5月の神幸祭で一年間の五穀豊穡を願った神事が行われ、お田植え、稲刈りと年間の農事が行われます。そして、秋になるとその年の収穫に感謝を捧げる「収穫祭」が10月の第3日曜に行われます。また、「収穫祭」の前日の土曜日には、夜神楽が奉納されています。山霊神社から飯盛神社へ出来高の報告を兼ねて、稲の旗を奉納した事がこの祭りの始まりとされています。しかし、現在では行われていません。

④ 弓射行事(ゆみはなし)畑地区

分類／祭 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

家内安全、五穀豊穰を祈願して行う弓を射る行事であり、町内では寒田畑地区(11月)の他に、地域ごとに、それぞれ行われていました。どこも輪番制で座元の引き受けをし、弓と矢を作り、矢を放つ神事となっています。18時頃から始まり、最後に座元の家主が弓を射って終わるのが20時頃と記録されており、これを弓祭り、流鏑馬と呼ぶところもあります。下野国の時代から行っていた、弓矢で天皇家の吉兆を占う「射法(しゃほう)の儀」を、宇都宮家が一子相伝の奥義として伝承していたと伝わります。しかし、宇都宮家の滅亡によって奥義は断絶し、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、正しい「射法の儀」ができなかったことを悔やんだと伝わります。このように、宇都宮家は弓の名手だった事から由来した行事ではないかともいわれています。現在は途絶えています、復活が望まれる行事です。



【艾蓬(がいほう)の射法について】(別資料)

城井氏には古くから伝わる「艾蓬(がいほう)の射法」という秘法がありました。神功皇后が三韓征伐で用い、中臣氏がこれを承け継ぎ、宇都宮信房の遠祖である関白・藤原道兼に伝授され、その子孫の宇都宮家に伝えられました。吉凶の占いや、邪気を払い、また戦勝祈願に用いられる弓術儀式で、代々一子相伝の掟が守られて、当主以外は執行することができませんでした。後に秀吉は朝鮮出兵の際、故事にあやかりこの儀式を行おうとしましたが、すでに詳細を知る者はおらず、城井一族の滅亡により、艾蓬の射法が断絶したことを知らされた秀吉は、深く悔やんだといわれています。

⑤ 猿の供養祭り

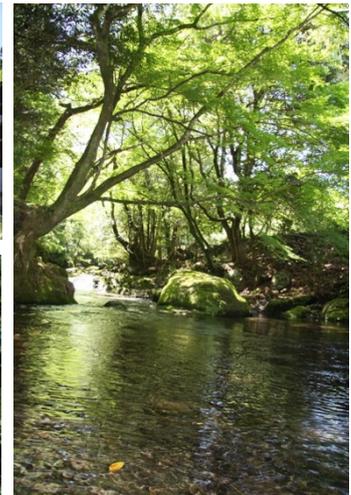
分類／祭 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田畑地区

昔、畑(はた)地区で悪さをする猿が出没しました。この猿を捕らえようと猟師が撃ったところ、身ごもった母猿だったとのことで、「これは悪いことをした」と猟師が思い、猿がいた山の中腹まで住民が上がって、その場所で猿供養をするようになりました。毎年、春に供養を行なっていましたが、現在は途絶えています。

⑥ 山開き

分類／イベント 自治会／寒田 **住所／築上町大字寒田 2005 番地 2**

牧の原(まきのほる)キャンプ場は、耶馬日田英彦山国定公園内に位置し、福岡県森林浴 100 選にも選ばれている自然ゆたかなキャンプ場です。城井川の上流にある「牧の原キャンプ場」は、都会の喧騒から離れてゆっくりとリフレッシュできる自然体験空間で、バンガローや山小屋を備えた設備があり、キャンプのようにテントを張る必要がありません。昔懐かしの「五右衛門風呂」や、「石窯」を使用したピザづくりも可能で、親子で楽しめる環境が整っています。またキャンプ場そばを流れる城井川の源流は、小さな子どもでも安心して川遊びや釣りが楽しめ、この他にも、広場でキャンプファイヤーやバーベキューなども行えます。併設する「まこちの里」では、バーベキューに必要な炭やお土産品なども購入できます。



営業期間

・キャンプ場 5/1～9/30

・まこちの里 年中

(夏期以外は火・水休み)

⑦ もみじウォーキング大会・城井谷もみじ祭り

分類／イベント 自治会／寒田 **住所／寒田地区**

もみじの見頃にあわせて、ウォーキング大会が開催されます。ゴール地点は牧の原キャンプ場で、鮮やかなもみじを楽しみながらウォーキングが楽しめるコースとなっています。「城井谷もみじ祭り」も同時に開催されています。

開催日：例年 11 月上・中旬

【コース】

・18km コース 築城支所スタート

・9km コース 本庄の大楠スタート

・4km コース 山村自然学校(旧寒田小学校)スタート

【ゴール】

牧の原キャンプ場(耶馬日田英彦山国定公園内)



⑧ 櫛原神楽(国指定重要無形民俗文化財) (櫛原神楽講)

分類／伝統文化 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

櫛原を含む5地区では、古くから伝法寺に鎮座する旧郷社岩戸見神社の神幸行事を、5年に1度持ち回りで担当してきました。昭和29年、櫛原が当番となる前年に、鬼の衣装と神楽面を寄贈された事をきっかけに、扇谷神楽講に教えを請うたのが始まりとされています。当時はバイクさえも持つ人はおらず、扇谷まで険しい鉾立峠を歩いて越えて行く必要がありました。扇谷神楽のルーツは、松丸から上伊良原を経由して伝えられた神楽で、長年の時を経ても各地区では今なおその形を同じくしており、伝統ある神楽として継承されています。神楽の奉納は、櫛原地区の貴船神社で行われる神幸祭や秋祭で行われ、他にも京築神楽のイベントや、要請があれば市内県内各地のイベントにも参加するなど、精力的に活動しています。



⑨ 奏楽

分類／伝統文化 自治会／寒田・櫛原 住所／寒田・櫛原地区

神社の神事である大祓いや献饌(けんせん)、撤饌(てっせん)を執り行う際に、神楽講がお囃子を奏でています。楽編成については、太鼓・笛(神楽笛)・鉦(チャンガラ・とんびょうし)の三拍子であり、献饌や撤饌の際に奉納するものを「道囃子」、祝詞をあげるときに奉納するのが「祝詞」、猿田彦が登場する神事については「御先(みさき)」など、種類も異なります。神楽講は口伝であるため、地域や年代によっても異なっています。

⑩ 春祭り・秋祭り

分類／祭 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

櫛原地区の祭りは、年に二回(春祭り、秋祭り)行われています。春祭りは5月4日、秋祭りは10月第1日曜日に神楽が奉納されます。また、みやこ町などの神幸祭(春祭り)などでも、要請があれば神楽(櫛原神楽)の奉納を行っています。

⑪ 水神祭り

分類／祭 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

5月の第2日曜日に行われています。田畑に水を引いた際に、水神様に感謝を伝えるお祭りです。

⑫ 酉の祭り(貴船神社)

分類／祭 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

地元住民の方の情報では、新嘗祭(大祭り)のことではないかと云われています。他の地区では週末に合わせる所も多い中、暦通りのしきたりを守り、櫛原地区では12月の第1の酉の日に行われるため、酉の祭りと呼ばれています。

《景観・特産品・その他》

① 真河内の滝・東尾の滝・鬼の雁木の滝

分類／景観 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

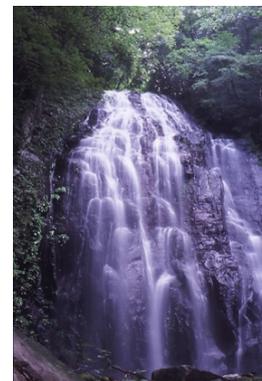
真河内の滝は、城井川の上流部にあり、牧の原キャンプ場から犬ヶ岳登山道を登ること約1時間程度で到着します。夏に訪れてもひんやりとする神秘的な滝であり、耶馬日田英彦山国定公園内にあって福岡県森林浴百選にも選ばれています。夏には、牧の原キャンプ場から定番のハイキングコースとなっており、涼を求めて多くの人々がこの滝を目指します。

東尾の滝は、真河内の滝に行く途中に「道しるべ」があり、歩くこと10分程度で到着します。標高約650メートルの地点にあり、降水量で滝から落ちる水量が変化します。

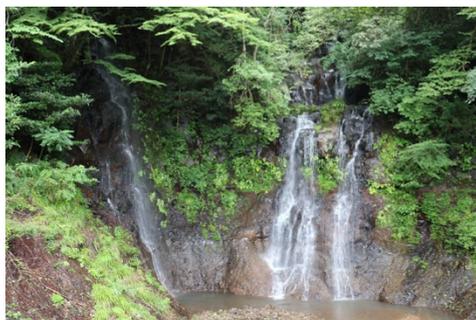
鬼の雁木の滝は、平成20年(2008)4月17日に、県道犀川豊前線(県道32号線)の未開通部分であった寒田(築上町)と求菩提(豊前市)の間が開通したことにより、見に行きやすくなりました。岩肌を流れ落ちる2筋の滝が美しいのですが、この滝は好天が続くと水量が減少するので、雨が上がった後の晴天の日が狙い目です。



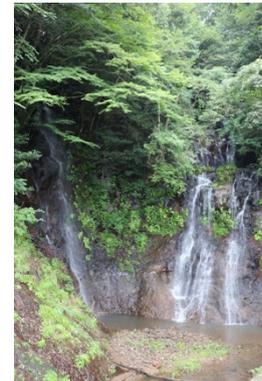
真河内の滝



東尾の滝



鬼の雁木の滝 1



鬼の雁木の滝 2

② 他^{たしろ}城のイロハモミジ

分類／景観 自治会／寒田

住所／築上町大字寒田

牧の原キャンプ場を流れる城井川をさらに上流に登ると、他城のイロハモミジがあります。大きな岩場に息づく一本モミジであり、正午近くになると太陽はモミジの真上に上がります。紅葉の季節には多くの観光客を楽しませてくれるこのモミジですが、実は新緑の季節も美しくさわやかな姿を見ることが出来ます。また、モミジの色は年・時期により異なります。



③ ガニ坊(蟹坊)の棚田・飛び岩(山霊神社の跡地)

分類／景観 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

その昔、ここには求菩提山の飯盛神社の修験道の宿坊がありました。現在、耕作は行っていませんが、彼岸花も咲く綺麗な棚田で、美しい景観となっています。また、ガニ坊の近くに「飛び岩」があります。これは養老岩とも呼ばれ、現在の寒田の山霊神社の元宮が鎮座した場所と伝えられており、石碑には「明治42年山霊神社由緒地」と刻まれています。(昔は鳥居もあったといいます。)

※寒田の山霊神社は明治40年に二の戸の山霊神社を合祀しています。飛び岩を入れると山霊神社の跡地は4か所確認できています。



④ たこ淵

分類／景観 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

たこ淵は、他城のイロハモミジ下の溪流の少し下流の水子地藏堂付近にあります。源流に近いこの付近には、淵が無数にありましたが、砂防ダムで水の流れが変わった為に消えていきました。その中で残っている「たこ淵」は珍しく、昔を偲ばせる景色となっています。



⑤ 寒田磨崖仏(寒田石佛)

分類／景観 自治会／寒田

住所／築上町大字寒田

寒田磨崖仏は、牧の原キャンプ場に向かう途中にある磨崖仏です。この磨崖仏は、もともと鉄工所を行っていた河野準一郎さんが1人で掘ったものであり、河野さんは石仏で知られる大分県国東の生まれです。子どもの頃から石仏は身近な存在だったらしく、何度か四国八十八箇所霊場巡りをするうちに



亡くなった奥様の供養の意味を込めて自分で磨崖仏を彫りたいと思うようになったそうです。

この2体の磨崖仏は迫力満点であり、向かって右は高さ9.3メートルの牧野観世音菩薩、左は高さ11.1メートルの牧野不動明王となっています。

⑥ ケンポナシ

分類／景観 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

ケンポナシは、貴船神社境内にある町指定天然記念物です。貴船神社は由来によると、養老2年(718)に現在の境内地よりも下流(字古宮)に鎮座していましたが、安永4年(1775)に火事のため焼け落ち、現在地に移転・再建されたと伝わります。神社参道入口には弘化3年(1846)銘の鳥居が建っており、この頃に植えられたとすると樹齢は150年以上と推定されます。

神社の境内地には、ケンポナシが古くから御神木として植えられていたそうで、古老の話では上本庄や築城にも植えられていたが、現在は全て枯死してしまったそうです。そうした状況の中で、樹齢150年以上に達するケンポナシは近在では大変珍しく、今後、指定文化財として永く保護していく必要があると考えられています。



⑦ かかし風景

分類／景観 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

かかし風景は、交通安全案山子コンクールで優秀賞を受賞された鱒淵さんを講師に迎え、かかし作り教室が開催されていました。しかし、現在では開催が難しくなっており、継続が危ぶまれています。今後もこのかかし風景を守っていければと、地元の方は願っています。



⑧ 櫛原エリアの景観と特産品

分類／景観・特産品 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

櫛原地区には棚田がいくつかあり、秋になると畦畔に見事な彼岸花が咲き、多くの見物客やカメラマンで賑わいます。また、櫛原地区では菊を栽培している生産者も多く、特産品として各地に出荷しています。

⑨ 寒田ばなし

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

山深い寒田の里に伝わる「寒田ばなし」は、バカバナシ(馬鹿話)ともいわれています。寒田郷に来た小笠原藩の外様役人に対し、自らを阿呆道化者として抵抗した地元民のお話ともされますが、宇都宮氏を滅ぼした黒田氏による、宇都宮氏に縁がある住民への迫害を防ぐために作られたとも伝わっています。馬鹿なふりをして、黒田氏に反旗をひるがえす恐れが無いと、相手を安心させる為の地域住民の知恵でした。



【録音テープの内容】

鎮房が御客の座にチイチかる。お酒やる、御馳走が出チー、大分酔がまわっちかる。突然天井が墜ちて来たゲナ。仕掛ちやる綱が切れたんで、押し潰されるかつ思ふたら、ごうな力強い男ぢゃったき、そりユ両方ン手で受けた。そうすると隣リン室に居った松田小吉チウ豪傑、今ゼン村に居る松田勇吉やんの先祖じ御座りやす。その小吉が飛込んぢ入っち、鎮房ン身を護り近づくもん又十八人も切りまくった。黒田の奴む、これにや困ってどうすることも出来ンかる、仕様ぐネーかる、床ドンに廻っち、短クエ柄ン槍ぜ、下ン方かるつき上ち、刺したもんぢゃき、とーと一殿様む、力がつきて天井ン下になっち死んぢしもうた。

以上は、雑誌「豊前」に掲載された鹿塩石人氏の「宇都宮釣天井漫記」の一節です。語り手は上城井村寒田の出身である中野さんです。鎮房が風呂で釣天井によって殺害されたとの説は、将軍秀忠と本多正純の確執をあらわす宇都宮城釣天井と混同されており、民間では広く流布しています。

※また、築城町誌 第八編 民族では以下のように記されています。

『寒田話はバカバナシ(馬鹿話)ともいわれたが、口承文芸の「愚か村話」に属する話であり、辺鄙な村の住人が、言葉や事柄を知らないために失敗する笑話である。九州には寒田話(寒田ばなし)を初め、大分県日田市の津江山話、福岡県の野間話、佐賀県の倉谷話、長崎県の世知原話、熊本県の五箇荘話、鹿児島県の日当山話などがあり、全国で三十五カ所ほど確認されている。よく似たストーリーが分布することもあり、辺鄙な山間部の村などの話として仮託されたものであると考えられる。交通の不便な山間部では、古い言葉や習俗、伝統を保ち続ける傾向があり、平野部の人たちから特異な目で見られたことも、仮託された原因であろう。』

かつて、寒田小学校で「寒田ばなし」を創作劇にして上映していた際には、このように言い添えられました。「寒田の村の人たちが知恵を出し合い、わざと何も知らないふりをして権力に立ち向った話です。しかし皮肉なことに、寒田ばなしは山村で一生懸命に生きた人々を、田舎者で物知らずとしてバカにする話として伝えられてしまいました。(中略)私たち寒田小学校の全員は、本当の寒田ばなしをひとりでも多くの人に知ってもらうための、この創作劇に取り組みました。」

築城町誌、下巻 476～482 ページに 34 話の寒田話が収録されています。その中でも特に地元の印象に残っているのが下記になります。

- ・茶の実
- ・殿様に「土地の帳面を出せ」と言われ“トチ(の木)で作った面”を差し出した話
- ・手水をまわせ
- ・風呂を立てる

⑩ 寒田エリアの特産品

分類／特産品 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

「寒田こんにゃく」は、かつて鉄工関係の会社を営んでいた加藤さんが鉄工の技を駆使して工場で製造したこんにゃくです。原材料となるこんにゃく芋は加藤さんの畑で採れたもので、物産直売所(まこちの里)ほかにも、一部スーパーにも卸しているとのこと。

他にも寒田には「あられ」「柚子ごしょう」「さんしょうみそ」「菊」「きくいも」など豊かな自然を活かした特産品が数多くあり、北九州方面への出荷も行っています。また、以前はチョコロギの生産にも力を入れていたそうです。



⑪ 小学校での神楽指導

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

寒田地区は旧築城町内の他地区と異なり、1地区1神楽1小学校であった為、寒田小学校の全校児童に対して神楽を授業の一貫として教えていましたが、廃校により現在は上城井小学校にて行われています。子供神楽としての奉納は、行われていませんが、学校内の行事(文化祭、卒業式など)で舞っており、将来は子供神楽の奉納も考えられています。本神楽は男性のみで行われますが、子供神楽は男女共に舞う事が可能であり、現在20名前後の子ども達が参加しています。



⑫ 乳のみ坂(民話)

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

坊やのお父さんは、求菩提のお山できびしい修業をなさっている。だから坊やは、お母さんと寒田の里で暮しながら修業の終るのを待っている。月に一回お母さんと坊やは、求菩提に登ってお父さんに逢う。お母さんにおんぶされて、曲がりくねった険しい道を上り下りする。

冬になった。二三日前に降った雪が、あちこちに残っている路を踏みしめて今日も母子はお山に登った。「坊や、きつかりうけど我慢してね。今度でおしまだよ。」お母さんは、独り言のように坊やにお話する。お父さんの修業も、もうしばらくでお終いになるはずだ。「春が来たら、三人一緒に暮らせるからね。」

お父さんと別れて、帰りの道についた。お母さんは、しっかりと坊やをおんぶして山を下る。坂道にかかる、よほど気をつけないと足が滑る。真向いから冷たい風が吹き上がって、体は汗ばむ程だが、顔が刺されるようだ。お母さんは、坊やの頭に風が当たらないように気をつけながら下っていく。「お山を出るのが、少し遅れたようねえ。日の暮れないうちに帰ろうね。」お母さんは、足を早めた。道ばたの枯すすきが風になびいて、遥か下の方から鳥の声や牛馬の声を運んでくる。風が急に冷たくなったようだ。

坊やが、むづかりはじめた。締め付けられて苦しいのか、お腹が減ったのか。「お腹がすいただろうね。お家に着いたら、たっぷりお乳をあげようね。」お母さんは、懸命に下るけれど、七まがり八まがりの坂道は気をせかさばかりで、なかなかはかどらない。

もう足もとが暮れはじめ、危うく滑りそうになったり、石ころを踏んでよろけたり、その度に坊やが泣声をあげる。もがく。「もうしばらくだからね。」「もうすこしだよ。」お母さんは、懸命に歩くけれど、この坂の長いこと、長いこと。いつも一休みして坊やに乳をのませる所だけれど、日は暮れそうだし、この寒さ、今日は休まないことにしてお母さんは、なおも歩き続ける。やがて坊やが静かになった。「眠ったらしい。可哀想に……。」

やっと寒田のともし火が近くなり、坂道も楽になった。坊やがとても重い。動かない。お母さんは不安になった。とても不安になった。「坊や、坊や……」きつくゆすってみたが全く動かない。もうたまらなくなって背からおろした。胸に抱いて、激しくゆすった。「坊やっ、坊や……」お母さんの叫び声が、夕やみを引き裂くように響いたが……。

「ちのみ坂」の名前の由来について、様々な説があります。この物語は、「乳飲坂」説を脚色したのですが、寒田から求菩提山は古代から重要な交通路でした。修験行者の道として活用され、その後は宇都宮氏(城井氏)の豊前支配の道として活用されました。

少々物騒な説としては「血呑坂」説もあり、天正16年(1588)、中津城で謀殺された宇都宮鎮房公の事件に関係し、「血の涙を流した坂」という説や、鎮房公が討たれたことを大平城に急報した一武者が、血だるまとなって此の坂を越えたという説もあります。これは、「ちのみ坂」が「ちぞめ坂」と解されたものといえます。

⑬ 宇都宮氏の歴史

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

宇都宮氏の遠祖は藤原北家の藤原道兼といい、その曾孫の宗円が、前九年の役の頃に下野国日光山別当となって、奥州の安部貞任調伏の祈祷を行い、この功績により後冷泉天皇より下野国を賜りました。宗円の子が宇都宮氏2代当主の八田宗綱で、その子の朝綱が宇都宮姓を名乗り、朝綱は源頼朝に「坂東一の弓取り」と賞賛されました。孫の頼綱は藤原定家との親交が深く、小倉色紙(小倉百人一首)の作成を依頼して宇都宮歌壇を築きましたが、朝綱は建久5年(1194)に公田横領を訴えられて土佐国へ流され、頼綱も豊前国に配流となっています。(その後、罪を許される)

宗円の次男で八田宗綱の兄弟である中原宗房は、鳥羽天皇の皇后である待賢門院(たいけんもんいん)(藤原璋子)に仕え、豊前国仲津郡城井郷(現在の福岡県京都郡みやこ町)に地頭職として赴任しました。豊前国に入部後、待賢門院の法名である真如法から名前を取り、真如寺と如法寺を建立しています。宗房の孫(子?)である信房は源頼朝の挙兵に参陣し、鎮西奉行として文治3年(1187)には鬼界ヶ島の平氏残党討伐で功績を挙げました。建久3年(1192)には、平家方の板井種遠の跡地である伝法寺庄などの領地を得て、豊前国府に近い木井馬場(みやこ町)の神楽城を本拠とし、城井氏(豊前宇都宮氏)を名乗りました。信房は宋から帰国した俊祐(しゅんじょう)に帰依し、京都東山の仙遊寺を寄進しました。その後、泉が湧き出したことから泉涌寺と命名され、現在は皇室の菩提寺「御寺」として、格別に尊崇されています。

その後、景房、信景、通房と幕府執権の北条得宗家と結びつき、豊前最大の武士団に成長しました。五代目となる頼房(薩摩六郎)の代には、本拠地を木井馬場から左隣の通称「城井谷」(築上町本庄)に移し、若山城(本庄城か?)を築いて菩提寺の天徳寺を建立しました。天徳寺には、後冷泉天皇より宇都宮氏の祖である宗円に下賜された「金銅三足臺(がま)香炉」があります。山号の「月光山」は、このガマに由来するともいわれます。

南北朝時代の当主である冬綱は、鎌倉幕府御家人で下野宇都宮第8代当主である貞綱の子であり、豊前宇都宮氏の宇都宮頼房の養子となったとされています。はじめは高房と名乗り、北朝方から南朝に降伏した後に冬綱となり、北朝に帰参して晩年は守綱と改名しました。応安7年(1374)に冬綱・家綱父子が城井高畑城で挙兵しましたが九ヶ月後に落城し、城井氏(豊前宇都宮氏)は急速に衰退して戦国時代には周防長門の大内氏の幕下に属することとなりました。

明応10年(1501)に大友氏が豊前に侵入した際に城井直重(家尚系統)は大友氏に加担し、大内氏に城井本庄城を攻められて敗北しています。これより尚直系統が嫡流となり、「尚直－盛直－秀直－弘堯－正房－長房－鎮房」と戦国時代最末期を迎えることになりました。大内氏が滅亡すると正房は大友氏につき、正房は室町幕府将軍・足利義植の御前で「艾蓬(がいほう)の射法」という先祖伝来の弓の技法を披露したといわれています。大友

氏の力が衰えると、秋月・高橋勢と和解し、島津氏に従って、再度、豊前で勢力を盛り返しましたが、豊臣秀吉の「九州征伐」によって豊前一带は黒田孝高に与えられ、鎮房は伊予国に転封を命ぜられました。これを不服とした鎮房は黒田氏に蜂起し、攻防は約3ヶ月間も続きましたが、鎮房は降伏し、毛利、小早川氏の安国寺恵瓊を通じて和睦しました。しかし天正16年(1588)4月20日、鎮房は中津城で、嫡主朝房も肥後で謀殺され、400年間続いた豊前宇都宮氏(城井氏)の歴史は幕を閉じました。



⑭ 寒田小学校関係(開校・庭園・閉校)

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

寒田小学校沿革史

明治8年 本庄小学校寒田分校創設(現農協事務所)

22年 校舎新築移転(現尾崎氏屋敷)

37年 校舎新築移転(現在地)

42年 校舎一棟を増築し、六学年までの児童を収容する複式学級編成

昭和16年 築上郡寒田国民学校と改称する

24年 上城井村立寒田小学校と改称する(寒田小学校父母教師会結成)

28年 三村合併し築城町発足

30年 築城町立寒田小学校と改称する

31年 校歌を制定する

35年 給食室新築落成

49年 創立百周年記念式典及び祝賀会举行

50年 百周年記念碑健立

51年 鉄筋防音校舎落成竣工

平成元年 完全複式編成(三学級)

16年 3月31日をもって閉校

創立百周年記念として建てられた石碑には「此の風致園は開校百年を記念し本校同窓生と鶴田悟氏と共同事業で造園した昭和五十二年」と記されています。

校章には豊前宇都宮氏の家紋「三つ巴」が記されています。



⑮ 寒田小学校の被ばくエノキ二世

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

このエノキは、広島に原爆が落とされた時に爆心地から約1キロメートル離れた場所で被ばくした、エノキの子ども(二世)です。1993年3月、卒業記念樹として植樹されました。本校の子どもたちと被ばくエノキとの出会いは、1988年5月の広島への修学旅行にさかのぼります。その修学旅行で、被ばくエノキの世話を続けている広島市立基町小学校の児童会と平和学習の交流会をおこないました。

交流会で朽ち果てた被ばくエノキが切られてしまう計画にあることを知った本校の子どもたちは、全校で「被ばくエノキを切らないで」という作文やポスターを作り、広島市長に届けました。その取組は新聞にも大きく取り上げられて保存運動が広がるきっかけとなり、被ばくエノキは保存されることになりました。

それ以来、寒田小学校の子どもたちは2年に一度の広島への修学旅行で、太田川沿いに立つ被ばくエノキを訪れ、平和への誓いを新たにしてきました。このような取組を知った福田安次さん(昭和20年8月6日広島市宇品で被ばくし、エノキを通して平和活動をされている方)から「被ばくエノキの苗木を育ててみませんか」という申し出があり、それを受けてエノキ二世が贈られることになりました。(二世は全国に13本)

残念なことに広島の被ばくエノキは1989年に枯死し、1996年に「記念像」になってしまいましたが、朽ち果てる前にいくつかのいのち(苗木)を残してくれました。寒田小学校に贈られてきたエノキ二世は、いのちを引き継ぎ、大きく成長しています。また、この二世から誕生した三世は、横浜市井戸ヶ谷小学校に植樹されるなど、多くの人の平和への願いを受け継いでいます。



⑯ 長湊

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

山霊神社から東に徒歩3分程で、県道237号寒田下別府線と城井川が最も近接する場所に「長湊」があります。水路からオーバーフローした水が複数箇所から流下し、ごく小さな溪流瀑に近い水流が出来上がっています。かつてはここから先まで水路を引き、製材所で水力発電を行なっていました。周辺の木々の深い緑と相まって、パワースポットのような清涼感が感じられる不思議な水流景色は、非常に魅力的です。



⑰ 神野完吾(こうのかんご)(櫛原寺子屋・医者)

分類／その他 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

神野完吾先生は、文化14年(1817)、築城郡赤幡村(現築上町大字赤幡)で生まれました。八田村(現築上町大字西八田)の小野原善言の下で学んだ後に、師匠の小野原がかつて学んだ日田の咸宜園で漢学を修めました。

そして漢学を学ぶ中で漢方医学に興味を持つようになり、秋月にて漢方医学を修めました。その後、江戸末期から明治半ばにかけて、現在の築上町櫛原で医師の傍ら、寺子屋(健徳館)を開いて子ども達に読み書きを教えました。僻地医療が現在ほど発達してなかった当時、医者として村人達の命を救う傍ら、山間の里の子ども達に学ぶことの大切さを教えた教育者でもあった神野完吾先生は、現在でも地元民の間では感謝と尊崇の念の対象となっています。

⑱ 寒田エリアの自然

分類／その他 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

寒田エリアは、福岡県絶滅危惧種に指定されるスギタニルリシジミ(チョウ)やヤマネ(国指定天然記念物)の生息地として有名で、スギタニルリシジミの餌となる天然のキハダも多く生息しています。また、絶滅危惧種のクマタカの発見も報告されており、寒田地区には希少な生物が存在しています。



《史跡》

① 城井ノ上(きいのこ)城址

分類／史跡 自治会／寒田 住所／築上町寒田

最も奥まった場所にある城で、『城井谷絵図』には「城井盾籠所」、『豊国紀行』には「敵をのがれてたてこもる所なり」と表記されています。本道から奥に車で進むと、「三丁弓の岩」と呼ばれる岩があります。ここは「射手が三名おれば、敵一兵も通さず」ということから名付けられました。「寒田水子地蔵」の先から登山道が整備されており、登り口から約5分程度で表門に到着します。



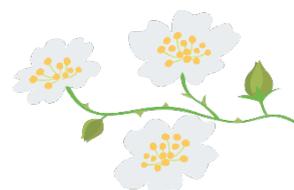
ここは自然の岩によって守られたゲートになっており、城井ノ上城の自然の岩による表門となっています。

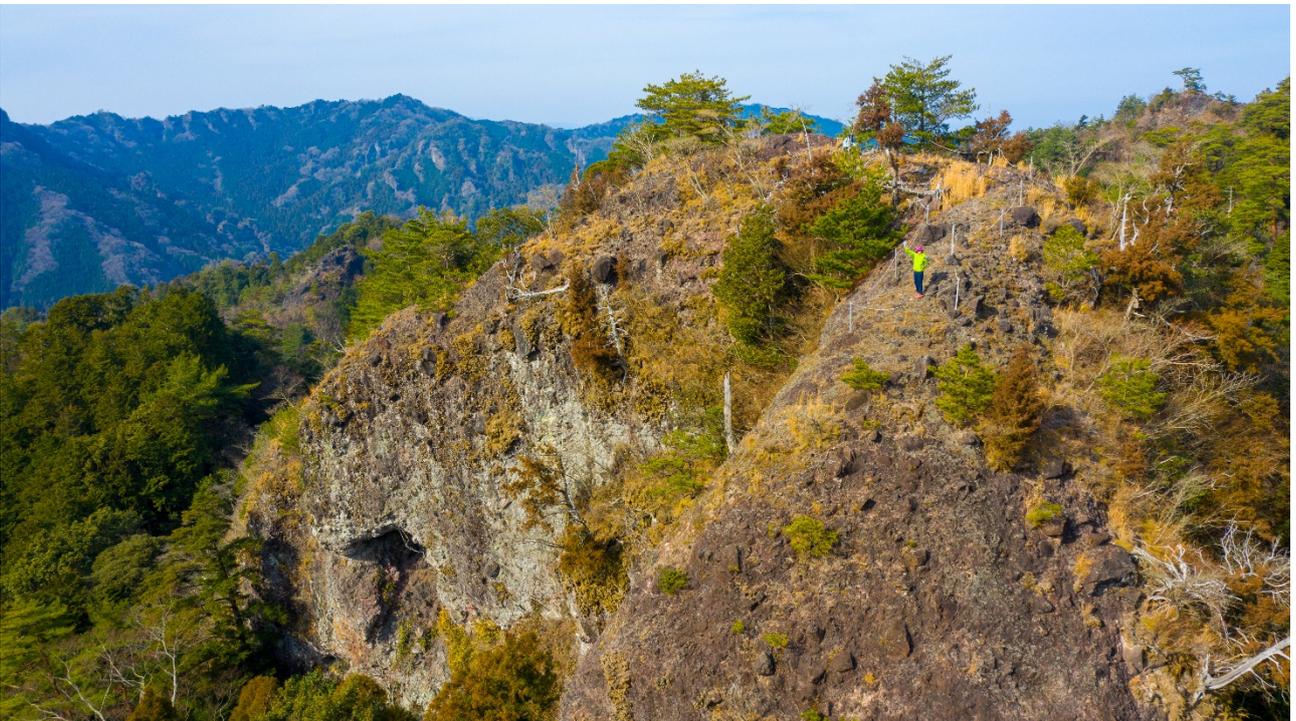
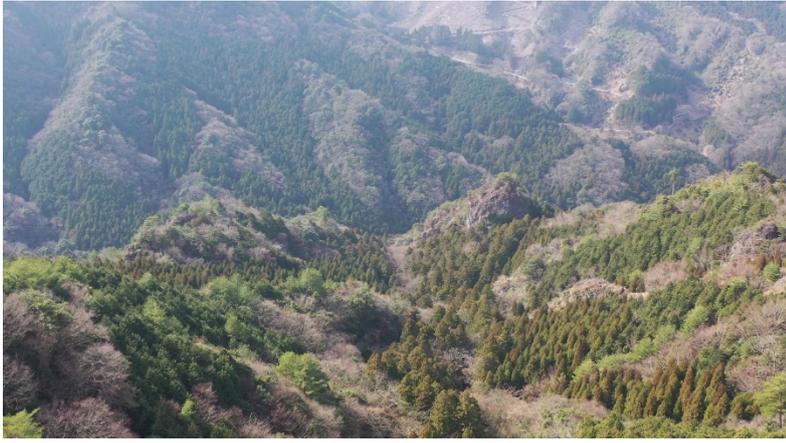


表門から進むと広場があり、ここは周囲を岩壁に囲まれた自然の内城となっています。さらに約30分程度歩けば裏門に至り、急勾配のくさり場を登っていけば、自然石による裏門と呼ばれるゲートに到着します。裏門を抜けると、谷を下って下山するルートと、岩壁を登って自然の展望台に至るルートがあり、軍手や運動靴などの装備があれば、見晴らしのよい裏門展望台に行くことができます。



城井ノ上城は、一般に言う「城郭」ではなく、山城であるために天守閣などはありません。詰の城としての機能をもっており、岩壁や絶壁は「難攻不落」と言われていた理由が伺えます。





② 飯盛神社／飯盛山東光寺／寒田神楽縁の場所

分類／史跡 自治会／寒田 住所／築上町寒田 295

養老年間に求菩提山護国寺を開いた行善和尚の開基と伝わります。後に頼厳上人とともに国宝銅板経を勧進した勢実和尚が、康治元年(1142)に東光寺と飯盛山大権現を開きました。ここは、求菩提六峰の一つとして数えられ、上宮、中宮があり、周辺には窟が散在しています。山麓の水田の発掘調査では、この東光寺の一部と思われる大型建物跡が検出されました。修験道との繋がりが色濃く、切り立った岩場の上に中宮や上宮があり、求菩提山千日行成就者の修札や多数の古文書が残されています。中宮に神様と仏様を祀っているのは、神仏習合の表れと言えるでしょう。

また、宇都宮家が関東から来た時代、藤原家と婚姻関係を結んだ村上天皇の子女がいて、この人物(姫)が飯盛神社に祀られていると地元に伝わっています。



③ 山霊神社／寒田神楽縁の場所

分類／史跡 自治会／寒田

住所／築上町大字寒田 634

山霊神社では、寒田神楽が奉納され、神幸祭が行われています。以前は収穫祭も行われていました。社殿は何度か火災で失われ、神社の場所も、以前はガニ坊の「飛び岩」付近にあったと伝えられています。また、キリスト教禁止令が出た時のお札が残されています。



④ 畑の観音

分類／史跡 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

飯盛神社の対岸にあり、中世作の木造如来坐像は飯盛山東光寺との関係が推定されています。お堂の横には、五輪塔群もあります。



⑤ 芭蕉塚

分類／史跡 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田(次郎坊峠)

黒田官兵衛が宇都宮家を滅ぼしたことを悔いて詠んだといわれる句が、求菩提資料館に保管されており、九州で初めて花見をしたのは官兵衛だといわれています。天明3年(1783)、芭蕉の没後90年の節目に、伊勢和睡という人がここ寒田の乳呑坂で扇会の句会を催し、その記念に建てた句碑になります。

このもとに 汁も鱧も さくらかな

この句は芭蕉が、元禄3年(1690)に伊賀上野の小川風麦亭で詠んだ歌仙40句の発句であり、花見の宴の汁にも、なますにも、何もかもに桜の花が散るさまを詠んだ句です。句碑は寒田の山中に、6本の桜の古木を背に立っています。



⑥ 大平城址(城井城址)

分類／史跡 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

『城井谷絵図』では「城井城」と表記され、「越崎平」の山頂に築かれています。宇都宮氏は大平城の築城によって、求菩提山四至へと侵入し、山の宗教権力へその支配も強めていきました。本領安堵にこだわった鎮房は、豊臣秀吉より伊予国転封を命ぜられました。これに従わず、天正15年(1587)10月2日、大村助右衛門から大平城(城井城)を奪還し、黒田氏に一揆を起こしています。天正16年(1588)、将来的な禍根を絶とうとする黒田孝高と長政父子の策謀によって息子の鎮房が殺害され、長房もその後、居城に攻め寄せた黒田軍のため一族と共に殺されました。宇都宮氏後期の山城であり、城台、石蔵、水の手などの地名が残っています。



⑦ 首塚

分類／史跡 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

天正 15 年(1587)、一揆を起こした宇都宮鎮房を鎮圧するため、黒田氏は広幡城を攻略して岩丸から南下して攻め入りました。しかし、黒田家臣の大野小弁正重、毛利家臣の勝間田彦六左衛門重晴らは、城井方の塩田内記、新貝荒五郎に討ち取られ、黒田長政は辛うじて馬ヶ岳城へ逃げ帰りました。このとき、討ち取った首八百余りが櫛原の地に並べられ、現在も「首塚」という地名として残されています。

⑧ 御手洗観音

分類／史跡 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

櫛原には 5 つの隣組があり、それぞれに観音堂(地蔵堂)があります。御手洗観音は、その一つであり、(丸岩橋近くにある) 獣害対策の侵入防止柵を開け、田のあぜ道を通った先の森の中を 10 分ほど進んだ岩洞窟に鎮座しています。年に 1 回、地元の方たちでお盆にお参りを行っています。



⑨ 小山田城(見張り台・殿様の足跡)

分類／史跡 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

天正 15 年(1587)10 月、黒田長政は寒田に籠城した宇都宮鎮房を討つため、ここ小山田城から約7km 下流の広幡城を攻略し、岩丸に陣取り、城井谷を攻めました。一方、鎮房はここ櫛原の黒岩の谷を登り詰めた「城ヶ平」と呼ばれる小山田城周辺で民兵共々、奇襲をかけました。峰合戦とも呼ばれる第一次城井谷攻めの戦いであり、黒田側の数多くの兵が討ち取られ、今も供養碑や首塚が伝えられています。手痛い敗北となった黒田長政は、馬ヶ岳城(行橋市)に退去しました。小山田城周辺には「馬ノ背峰」と呼ばれる険しい痩せ尾根や、鎮房が刀を洗った「千両沼」、鎮房の足形の岩など、数々の英雄伝説が残り、いかに「岩丸山合戦」での城井軍の勝利が讃えられたかを物語っています。



⑩ 古戦場(黒田の重鎮が亡くなった)

分類／史跡 自治会／櫛原 住所／築上町大字櫛原

【大野小弁正重の墓】(峰合戦古戦場)

大野小弁は黒田如水の家臣であり、城井谷攻めに従い、宇都宮鎮房の家臣である塩田内記兼矩に討たれたと伝えられます。此の合戦を、古来「峰合戦」といいましたが、此处がまさしく其の場所であるとされています。

【勝間田彦六左衛門の墓】(岩丸山古戦場)

大字岩丸の岩丸山市道は、俗に勝間田越と呼ばれ、杣道にも似た険阻な山道にあり、これを越えると小山田谷に通じます。

そこに立つ石碑には表に「勝間田彦六左衛門重晴戦死之墓、天正十六年戊子十月九日、行年四十六才」とあり、裏に「慶応元乙丑年十月、小倉篠崎藩、勝間田彦左衛門重信建之」とあります。(但し、岩丸山合戦は天正 15 年 10 月 9 日と黒田家譜では記されている) 城井闘争記では、勝間田彦六左衛門は毛利方の援将で、宇都宮鎮房の家臣の新貝次郎(実は新貝荒五郎秀之)によって討たれたとあります。また、勝間田彦六左衛門は、中津城井神社の記には備前下津井の城主、とあります。



大野小弁正重の墓



勝間田彦六左衛門の墓

この碑を建てた勝間田彦左衛門重信については、詳かにしていませんが、篠崎藩は代々小倉小笠原藩の支藩であり、後に白い千束に移って千束藩となった藩です。墓の建てられた慶応元年(1865)10月、小倉藩、篠崎藩共に、長州毛利藩のために、小倉を逃れ、香春に移って、攻め入った毛利藩と小競合をしていた時節になります。

⑪ 貴船神社／櫟原神楽

分類／史跡 自治会／櫟原 住所／築上町大字櫟原

昭和29年、鬼の衣装と神楽面が町内会に寄贈されたのを契機とし、みやこ町扇谷神楽講より櫟原の貴船神社氏子に伝えられました。10演目の式神楽と、盆神楽、綱御先など6演目の特殊神楽が継承され、貴船神社に奉納されています。櫟原の岩の下(要芳博さん宅裏山)と大谷(公民館の東の山)に山霊神社の跡地があり、2社の山霊神社が明治20年に貴船神社に合祀されました。(現在、岩の下の跡地の石には「山霊神社跡」と刻まれています。)



⑫ 猿尾の陣

分類／史跡 自治会／寒田 住所／築上町大字寒田

猿尾の陣は黒田官兵衛、長政と吉川広家が二度目の城井谷攻めの向城とした小川内城から尾根伝いに約4km、寒田方面へ上った分水嶺、通称「猿尾の峰」にあります。ここは城井谷を挟んで宇都宮鎮房の大平城と対峙する場所で、現状では堀切のみが確認できます。

⑬ 城井神社(町外)

分類／史跡 自治会／町外 住所／大分県中津市二ノ丁 1273

中津城で黒田氏に誘殺された宇都宮鎮房は、この地に埋葬されました。宝永2年(1705)に中津藩主小笠原長円(ながのぶ)が「城井大権現」として、城の守護神として祀るようになり、その後、城井神社として改められました。中津城内、現在の公園の一隅にあります。

城井大権現由来に「黒田官兵衛孝高に被仰付(秀吉公)、既合戦度々に及んで後、謀計に和を請て、鎮房を仲津へ招き寄せ、天正十七年(十六年の誤)四月廿日於此所、終に殺害して、其の骸を直に埋め置かれ候。以来百十余年を経て信濃守長円(小笠原長円)右の由緒を被伝聞、則宇都宮鎮房を当城の(中津城)守護神として、去ぬる宝永二己酉年の比、小社を被造立仕候而、城井大権現と被申崇候云々」とあります。

宇都宮略系譜の方には、黒田長政が城内に紀府大明神をまつり、更に福岡転封後、警固大明神を祀つたと記載されています。

また、扇城神社(中津市二ノ丁)には黒田氏に殺された宇都宮氏の従臣が祀られています。城井神社と同じく宝永2年に小笠原長円が宇都宮氏の従臣を稲荷大明神として祀つたことが始まりです。合元寺で討たれた45名は下記の通りとされています。

